

大隊のみは広東地区にあった第百四師団の指揮に入り、石龍東方地区の警備に任じていた。旅団編成は独立歩兵第九十七・第九十八・第九十九・第百大隊、旅団砲兵、工兵、輜重兵隊からなり、各歩兵大隊は人員八五一人、馬四四〇頭、さらに一九・二・二五の「大陸命第九四六号」により、独立歩兵第百一大隊を臨時編成して強化された。

このように一個師団、三個独立混成旅団という劣勢の日本軍は対峙する中国軍一五個師に攻められては、分散する占領地を確保することは困難である。従って攻められないようにすることで精いっぱいという情況である。

体験記にある如く、昭和十八年六月からの半年間の苦闘に対し、他兵団から援助を求めるとはできない。また、汕頭地区には潮兵団所属は四個大隊である。中・北支と異なり、孤立した南支軍は包囲されれば玉碎の他ないのである。

解説者も第二十三軍の独立大隊に勤務したので、兵団長機上指揮により歩飛連合の実を挙げ、見事潮州奪

回の武勲に心から敬意を表したい。

湘桂作戦中、西方で孤立奮闘した独立混成第二十三旅団配属の独立歩兵第七大隊は、小拠点を優勢な敵に包囲されつつ玉碎を免れ任務を完了している。南支各隊は常にこの様な危険を排しつつ陣地を死守していたのである。

## 私の大陸戦記

### 湘桂反転作戦

東京都 宮嶋政久

私は南支第二十三軍、独立混成第二十二旅団、独立歩兵第一二五大隊第四中隊の一員として、昭和十九年六月、大陸打通の湘桂作戦に参戦し、在支米軍航空基地を攻略し、中国大陸と仏領印度支那を打通するといふ建軍以来の大作線に参加、数々の苦痛と多くの先輩、同輩、後輩を大陸の戦野に埋めながらも帰還することが出来ました。

幾度かの死すべき境地を乗り越え、現在あるのは母をはじめ家族の祈りと、戦友助け合った結果であると同時に、私を生きて帰らせてくれた武運とに感謝し、毎年の靖国御霊祭りには欠けることなく参拝しております。

#### 命令を遵守した第四中隊

昭和二十年七月十八日、広西省靈川県の山岳戦「一号作戦」(撤退)とも言っていたが、正しくは前述のとおり「湘桂反転作戦、総称一号作戦」という。

第二五大隊(田賀)第四中隊、中隊長・佐竹重恵少尉は、尖兵中隊として至上命令である鶏籠嶺(海拔九二〇メートル)を占領すべく新安嶺に迫り、米式化した敵重慶軍(第四战区軍)と対峙していた。

大隊主力は、この鶏籠嶺を巡り布陣し、尖兵中隊の第四中隊第一小隊第一分隊(堀上友治軍曹)は十八日払暁、新安嶺の稜線近くに進出、斜面にへばりついていた。敵側も前面の山、二百メートル以内の至近距離に進出して蠢いている。

双方ともまったく至近距離の射程圏内である。優勢

な敵の忙しく蠢めく動作が肉眼ではつきりと、手に取るように見える。重慶正規軍の完全武装の兵たちが眼の前で動いている。

狙撃兵が凝視しているのが見える。狙撃兵の軽機(チェコ)の銃身が不気味に動く。敵は、動く物体を見ると、自動小銃とチェコ機銃を駆使して一気に撃ってくる。

血気にはやる第一小隊第二分隊(佐藤金弥軍曹)軽機の射手が、敵の狙撃兵を仕留めてやろうと、じわじわ射程圏内へ誘い込もうとしている。しかし、いまこの位置で撃ってはいけない。撃てば友軍の位置がみすみす敵側にわかってしまい、わが陣地は不利な条件下に置かれる。中隊長は、これを阻止するため、尖兵小隊に伝えるべく伝令を出した。中隊長の命令を伝えるべく、私は葡萄で第一小隊の位置に辿り着き命令を伝達した。

第一分隊の位置からかなり離れたところにいた安藤上等兵。危険を冒して堀上分隊へにじり寄った。私に遅れまじと、草の根を掴みながらじりじりと這い上がった。

てくる。敵の狙撃兵が銃口を向けて、しきりにわが陣

地を窺っている。私はとっさに「危ない！ 安藤出るなっ！」と怒鳴った。敵に聞こえるのではないかと思うほどの声をあげてしまった。だが山一つ隔てたこの位置からは容易に敵側に聞こえるはずがない。と思う間もなく、堀上軍曹もまた大きな声で叫んだ。「安藤！ お前……そこに居れ！」と安藤上等兵の進出を制した。しかし、一瞬遅かった。敵状を察知できなかったのか？

安藤上等兵は、ちらりと上体を浮かした。その刹那、チェコが火を吐いた。たちまちタタタタッと軽快な発射音というよりか、クルクルクルッとコルクでもはじき飛ばすような不気味な発射音である。体験者のみを知る嫌なチェコの発射音である。「アッ！」と言って安藤上等兵の葡萄が止まった。左斜面の稜線にちらりと出した左大腿部貫通銃創である。

敵の銃眼の監視の中では手の施しようもない。ようやく安全地帯まで引きずってきた。至近弾のため、みるみるうちに軀がむくみ始めていた。衛生兵もまだそばにきていない。三角巾（仮包帯）を出して傷者の介

抱に当たり一時を凌いだ。

安藤は顔を歪め苦しうにもがいている。そばにきていた分隊長が、「安藤！ しっかりせい」という下から、力なく「すみません、すみません」を繰り返しながら虚空を掴んでいた。「おおい、安藤！ 頑張れよ……」。巻脚絆（ゲートル）を取り、編上靴の紐を帯剣（銃剣）の剣先で切り取り靴を脱がせ、上衣と襦袢（シャツ）のボタンを外し、すこしでも楽にしてやるうとしてみたが駄目だった。安藤上等兵は苦しい息の下から再び微かな声で「すみません」の一言を残し息絶えていった。

衛生材料は何一つなく、至近距離から撃たれたのでガス壊疽になった傷に施す術がなかった。普通、軟部貫通銃創というのは措置が早ければ大概助かるものだ。最前線に位置した兵士の悲劇である。

私と第一分隊は、なんとか早く戦友の遗体收容をしようとは急いでも、眼の前に敵の銃口が動いている。ちよつとでも腰高になると撃ってくる。

第二、第三の犠牲者の出るのを恐れ、身動きもでき

ない。最前線狙撃兵の銃口から片時も眼を離すことはできない。対峙である。灼熱の山岳戦、広西の気温は四〇度を超える猛暑である。七月十八日午前中に戦死した人の骸には、午後になるともう口元にウジ虫が這いずり回っている。そのウジ虫を取り除いてやることもできない。敵の動静を睨みつつ、一匹二匹とどんどん増えていくウジ虫どもに、為す術もない。時々遺体にちらりと眼をやり、その状態を見る長い長い対峙である。

敵の銃口（チェコ）と自動小銃に脅かされながら、まるでこの世の地獄絵の中にいるようである。ちょっとでも動けば、また第二の安藤がでる。それほど状況が緊迫していた戦場である。二十五歳の青春を戦野に明け暮れ、「草むす屍」となった安藤博司上等兵壮烈な戦死であった。

#### 中隊長倒れる

さながら地獄絵の中で、佐竹中隊長戦死の報が通伝により伝わる。堀上軍曹以下みな愕然とした。しばし沈黙した後、涙が堰を切って溢れ落ちた。隊長の命を

伝えるべく、第一小隊第一分隊へきて安藤が眼の前で殺され、伝令がそのまま釘づけになり、今またこの悲報。中隊の核心と仰ぐ中隊長の戦死である。戦争は残酷だ。誰彼と情け容赦なく、次々と人の生命を奪っていく。

現在地と指揮班との位置はわずかな距離であったが、自分の位置を移動するときは、前進あるのみで、心ははやれど、隊長の遺体に接することはついぞできなかった。佐竹第四中隊は七月十七日払暁、突撃敢行して「新安嶺」を占領していた。当日の戦闘において外川与四郎上等兵、小沢九吾二等兵が壮烈な戦死を遂げた。後日談によると中隊長戦死の様子は次のようであった。中隊を指揮中、敵弾により腹部を貫通されたそうである。さすが、豪胆な隊長も腹部貫通は致命傷と悟り、宮嶋にこの時計を返してくれと指揮班長へ手渡し、部下に、誰かタバコを持っておらんかと言い、最後のタバコを所望した。

佐竹中隊長は、終始笑顔絶やさずにいたが、衰えゆく体力に、自らの生命の限界を悟り、「わしゃもう

駄目じゃ……」といって所望したタバコをうまそうに喫って眠りについたそうである。

戦場には一発の砲弾、爆弾で瞬時に吹き飛ぶ戦死もある。このように戦場とは至るところ複雑である。いっどこで戦いが起こり、どこで死に直面するかはだれもわからない。

そんなとき、最前線に位置した武人が戦野において永遠の眠りにつくとはこのようなものなのであろうか、しみじみ痛感した劇的の死であった。この経緯は鷓鴣嶺に進出したときに知った。佐竹隊長らしく立派な最後であった、と聞き、また涙が溢れ落ちた。

佐竹少尉は、一見して体の大きな四角い顔だった、といった方がピタリ当てはまる人だが、ゆるんだ顔は親しみ易く、体に似合わず笑顔の優しい人だった。

私は、佐竹少尉の戦死の報が伝わるや、このときほど第四中隊の危機感を覚えたことはなかった。鷓鴣嶺に辿りついて戦線がしばらく膠着状態が続いたとき、第四中隊の時計として指揮の役割を果たした「ミルトン」の時計についての入手経路を回顧して、私がそば

にいたくとも、時計はそのまま持っていてくれればとまた涙が頬を伝わった。

私たち部下は、佐竹中隊長をして武人の鑑とあがめていたが、まさに戦場にある軍人として、最期まで戦線の指揮を気にしながら従容として死にいたのである。享年三十二歳であった。

#### 第四中隊再び突撃敢行す

佐竹隊長を喪った第四中隊は、押野准尉が指揮を執り戦線確保に燃え上がっていた。前述の重機が側防として前進基地へ進出するや、それに呼応して第四中隊は、中隊の総力をもって一斉に攻撃の火蓋を切った。左前面にいた敵の狙撃兵、チェコの射手はひとたまりもなく吹き飛んだ（安藤上等兵の仇は討ったのである）。大事にして取って置いた後盒の弾丸を前盒へ移し変えていたが、ほとんど撃ち尽くしていた。押野准尉は、最前線に位置し、自ら戦死者の銃を執り、撃って撃って撃ちまくった。土埃の舞う中、一斉射撃に入り連続して撃ちまくる小銃はかなり熱くなる。銃身に手が触れると焼けつくのではあるまいか？と思うほど過熱す

る。炎天下の射撃攻防戦である。急いでスピンドル油を銃口から流し込む。

佐竹隊長の遺志を継いだ押野孫助准尉（人事係）は東北出身の朴訥な人柄だが豪胆沈着な人であった。敵を目前にして撃ちまくる准尉の射撃姿勢は基本そのもので銃の射撃操作が実に速い。焼けつくような銃身を抱き、土埃の中で射つ銃の撃針でも折れたのか、「もうこれは駄目だ。そっちの銃かせや……」にっこり笑って別の銃を執り、射撃教範どおりの伏射で撃ちまくる姿勢に兵の私たちは、益々敵愾心を旺盛にして隊長と心身一体となり、執拗に撃ってくる敵を攻撃した。

新安嶺に辿りつき、昨十七日第四中隊はすでに二人の戦死者を出していた。今日、十八日現時点、佐竹隊長以下二人の戦死者を出しているのでいやが上にも敵愾心があがっている。いわば葬い合戦である。頼もしい重機のダッダッダッという発射音に呼应して、第一小隊堀上分隊はもうすでに付剣して撃ちまくっている。

佐藤金弥軍曹（軽機分隊）、白石寿一軍曹（擲弾筒

分隊）も突撃準備完了の合図をしている。敵の火器が沈黙したこの機を見計らった押野隊長は、ころはよし、と突撃命令を下した。「突っ込め……」「それ！ いまだ！」とばかり全員が陣地を蹴った。「わあ……」喚声を上げて一直線に突っ込んでいった。

この新安嶺の陣地を出て頂上を越えると前方はなだらかな台地になっていた。敵は前日もこの台地まで進出した模様である。台地を突っ切り狙撃兵のいた位置近くまで突っ込んでいったが、すでに敵兵は退いた後だった。

やれやれと思ったのも束の間、もう一つ山向こうからこんどは迫撃砲を撃ってきた。また退いたはずの敵は右斜面に移動していた。右側防火器として出ていた友軍の重機から丁度視界零、死角になるところでこの位置からまたチェコを撃ち出した。第四中隊は、狙撃兵のいた位置までおびき寄せられた恰好になり、ここに釘付けとなってしまう。ポツという発射音の後に、シュルシュルシュルという嫌な余韻を残して迫撃砲弾が頭上を通過していった。

孤立してしまった第四中隊は、ポツという迫撃砲の発射音が続くうちには動こうにも動けない。量に物をいませた敵は間断なくポツポツと撃ちまくってくる。ようやくある一定の時分、ポツという発射音の止まった間隙を衝いて、「それ！」とばかりみな一直線に後退した。その瞬間、暫し沈黙していたチェコを含む一斉射撃を喰らった。

どうって後退してきたばかりの指揮班の前に、一足先に後退した第三小隊所属（といっても中隊全員が二個小隊にも満たなかったのであるが）の岡田福五郎上等兵（十六年徴集）が腰を撃たれてしゃがみ込み、駆けてきた私を見るなり、「兵長殿！ 助けて下さい。腰をやられて立てないんです」。その瞬間、私の平手が岡田上等兵の右頬に飛んでいた。「甘ったれるな！ 敵前だぞ！」。ピシヤッと音がしたとたん、岡田上等兵は、立てないといっていた腰をパッとあげ、私の前へすくっと立った。

私は岡田上等兵を背負い、敵の射撃圏内を脱出した。岡田上等兵の出血は、私の背中一面を赤く染め、腹へ

回り臍の穴にまで溜っている。果ては禰まで真っ赤に染まっていた。「おい岡田休憩だ！」。先に退いてきた戦友のいる場所の恰好な所を選んで、二人一緒、くず折れるように草むらの中に横倒しになった。喘ぎながら駆け降りた背中 of 傷者をようやく安全地帯に降ろし、フウッ……と大きな息を吐いた。

傍らを見ると衛生兵の藤田弘兵長だ（十四年徴集）。彼もまた、私を見るなり、「おお！ 宮嶋か……。相変わらず張り切っているなあ……。」と吹き二人をぐるりと見回した。

兵は戦場において、いかなる場合でも己の任務を全うしなければならぬ、それは教育によって内務班で培われてきたのである。が、いまその実態を目撃した。衛生兵としての責任観念がそうさせたのだろう。戦線を一時離脱する撤退の渦中、本能的に傷者の介抱へと手が動いていた。

一足先に休んでいた衛生兵はサッと腰をあげ近寄ってきた。岡田上等兵を見て素早く止血をしてくれた。「藤田兵長！ すまん」。その労にねぎらいの言葉をか

け、衛生兵のそばへ腰をおろした。藤田兵長は、「今日もまたやられたな……」と呟いた。その言葉の終わらぬうち、私は大声をあげていた。「あれっ！ 藤田兵長、足どうした」。いきなりあげた大声に、藤田兵長はびっくりして私の顔を見返すと同時に、自分の投げ出している足下を見た。右足のふくらはぎの部分が貫通して巻脚絆に血が濃くにじみ出しているではないか。

藤田兵長は、ここで休憩するまで懸命に駆け抜けてきたのだ。血のにじむ己の足を見た藤田兵長は体を揺すって、急に「あっ、いてて」というと立ちあがれず独りで歩けなくなってしまった。

混乱の中の戦線を離脱するにあたり、緊張のあまり、己の足が貫通しているのさえわからなかったのである。衛生兵がついに急こしらえの担架で山を下りる破目になってしまった。

再び岡田上等兵を背負って山を下りる途中、溪流の淀んだ所で体ごとつかり、真っ赤に染まった襦袢・袴・袴下（シャツ・ズボン・ズボン下）、褌をも水洗いし

てそのまま着る。もうこの地点では完全に敵の視界から遠ざかり死角に入っていたので、悠々とこの作業ができた。前述のように広西の真夏は、日中の温度は四〇度を超える暑さなので、午後の陽でもすぐ乾いてしまいが、背中から伝わる血でまた赤く染まってしまふ。ようやく戦線を離脱して、傷者を患者輸送隊に委ね前送した（撤退作戦に後送はない）。

だんだん午後の陽は落ちてゆき、凄まじかった戦線にも薄暮が訪れてきた。人の命を奪い合った激烈な戦闘のあった戦場も、うそのように静まりかえっていた。

この戦闘で、同年兵の村上源四郎兵長、江面福松上等兵らも負傷した。こうして十八日の戦闘は、第四中队突撃敢行で成功したかのようにみえたが、佐竹中队長以下六人の死傷者を出して終わった。

#### 鶏籠嶺占領

いったん退いた新安嶺から第四中队主力は、目標の鶏籠嶺山麓へ夜陰に乗じて進出した。第四中队主力といっても、傷者や下痢患者の弱兵を前送してしまつた現有勢力では小隊編成も組めず、主力は中队長直属の

指揮下におかれることになった。押野准尉が中隊長となったので、中隊を改編した第四中隊は、建制順序で指揮班長は太田雪夫曹長である。

元氣者だけ選んだ尖兵小隊兼指揮班は、払暁と同時に鶏籠嶺の頂上を占領確保していた。ここに見る最前線の夜明けである。昨日の戦闘、戦死者のことも一切忘れたかのように嶺峰は静まり返っていた。大きく背伸びして朝霧の立ち込める中、遙か彼方の稜線に昇る曙を眺め、胸いっぱい深呼吸をした。夜が明け染めると中隊は直ちに配備についた。戦闘配備について、私たち兵隊の頭上へ今日もまた灼熱の太陽が迫ってくるようだ。

暑い、暑い、全く暑い。新安嶺を撤退の際、溪流で汲んだ水筒の水はすでもう半分ぐらひは飲んでしまった。腹の中に入った水は、ダクダクと汗に変わり発散していき、皆がだんだんと体力が消耗していくのがわかる。元氣なように見えるのは、絶えず敵状監視に目だけがギョロギョロと動いているからだ。

敵側は、今日もまた新安嶺の方へ向かってポツポツ

と迫撃砲を撃ち始めていた。小時間迫撃砲の攻撃が続いたが、なんの反応もない。新安嶺陣地攻撃の射撃は止み、しばし、戦線に小康状態が続いた。

鶏籠嶺を確保した第四中隊は、原動力である食糧の補給がない限り、現状維持も危ない。十七日、新安嶺へ辿りつく前に腹ごしらえしたのみで、その後は何も食べていないし、まったく食べる物が無いのだ。喉を通るものは水筒に補給した暑さで熱くなった水のみ。どの顔を見ても汗を逆なでした指の跡だけが、白い筋となって浮き上がって見える。この浮き出た白い筋の部分が己の体からの塩分である。兵隊はこの塩をなめでは生暖かい水を飲み、戦闘配備についていた。

敵の攻撃を避け、空腹と闘い、襲い来る睡魔に冒されながら、戦線は小康を保ったまま十九日の薄暮を迎えた。

戦線は膠着状態になったまま、二十日の午後を迎え、兵隊の中には、もう空腹で氣力を失うほどの者までが出てきた。食糧の欠乏はもう死あるのみ、との結論に到達した。なんとしても補給の見通しがない限りこの

ままでは飢え死にである。指揮班長、先任分隊長の意をまとめ徴発隊を決定した。

徴発隊は、山麓目指して斜面を降りた。ポツンポツンと山すそに民家があるのがわかった。民家は農家で、明らかに空き家であるのが事前にはわかった。農家には、いままで人の住んでいた気配は充分に察知できた。遠くから見ても小豚の放し飼いがしてあるのがわかった。

私らは、主食になる粉を見つけていた。ちょうど小屋の土間の表面（平面）に石臼が備えてあり、臼は足で蹴飛ばして粉をつく方法である。菊池と二人で一生懸命に粉を白米にするための米つきに精を出した。松井伍長らは飯炊きを始めた。米つきながらも飯の炊けるのが待ち遠しい。ようやく炊き上がった飯を三日ぶりに食った。うまい。ほんとうにうまい。副食などは何もない飯だが、飯盒の中には一粒の飯も残すまいと懸命に食べた。少しばかり見つけた岩塩をつけて食う飯の味は、なんに例えてよいかわからないうまさだ。山の上ではみんな腹が減ってぐったりしているだろうと思いつつも、徴発隊の特権とばかり夢中で空腹を

満たした。

一生懸命粉をついた。しばらくすると砲撃音ではなく、飛行機の爆音を聞き、ハッとわれにかえり、みんなを促して作業を急いだ。主食班は山を登り始めた。一人一個宛に飯盒に詰まるだけ詰め込んだ飯の量はかなり重い。喘ぎ喘ぎ、中隊主力のいる位置へ登りつめた。水筒にも水をいっぱい補給してきたのだ。指揮班長は喜び、「ご苦労さん」とねぎらいの言葉を隊長ともどもかけてくれた。みんなの顔に生き生きとした笑顔が戻り、ようやく精気を取り戻した戦友たちは冗談が出るようにもなった。生命の糧のありがたさ、尊い恵みをしみじみ痛感させられた。

山を下りているうちにも戦況は間断なく動いている。先刻、山麓で聞こえた爆音は胴体に星条旗と青天白日旗がくつきり浮かぶ敵偵察機であろう。「畜生！ 日の丸のついたのは一機も来ねえ」、誰かが虚しく呟いた。

二十一日は夜明けと共に敵状は活発に動き始めた。膠着状態になっていた戦線に再び砲煙が上がり

同時に爆音が聞こえ始めた。

敵の後方陣地へ輸送機らしいものが飛来して、物資を投下しているようだ。敵側は兵器、弾薬、食糧すべて飛行機によって補給されていたのである。それにひきかえ、わが陣地上空へは、日の丸のついた飛行機は壺川入りして撤退まで一機も飛ばなかった。

無茶な「象鼻嶺」占領！

壮烈押野准尉、大沢上等兵の戦死

二十二日未明、またまた大変な至上命令が到達した。九二〇高地より低い連峰の「象鼻嶺」を戦略上絶対的に確保せよというもの。

これにはわれら兵も驚いた。図上では、象鼻嶺の方が鶏籠嶺よりも高くなっているが、現実にはその逆である。いわば山岳地帯の一高地に過ぎない。兵も知る臆病なこの部隊長は、後方の机上論を振り回し、この作戦上象鼻嶺を絶対に確保せよ！との敵命である。この命令を受けた第四中隊長押野准尉は、吐き棄てるように、「この馬鹿者部隊長奴が！」といいながら、すぐそばにいた私に、「宮嶋……おまえ、こうなっちゃ

あ、陸軍も終わりだな……」と苦笑いをしていた。

東北は山形県出身の温厚なこの人は、佐竹隊長もそうだったが、直属の指揮班員には、気さくに話しかける人であった。

意見具申の通らぬ陸軍を歎きつつ、間もなく路上偵察に自ら出かけたのである。この時、押野准尉に同行したのは大沢上等兵。出発時、この任を嫌がり尻込みしていたが、私を見て「おまえ……指揮班にいるんだから、同年兵のよしみで断ってくれ！頼む……。腹が痛くてしょうがねえんだ。だから、だれかと替えるように言ってくれ」と頻りに哀願したが、「少ない兵力の中からの抽出だ、命令は絶対だぞ！」といいふめたので、しぶしぶ同行したが、不安におのく大沢の前に不吉が待っていた。

私たちの視界の届く中で迫撃砲しか撃たなくなっていた敵は、いつの間にか兵力を増強、進出して、射程圏内に侵入していた。この敵の射程圏内に飛び込んだからたまったものではない。たちまち集中射撃の餌食となってしまう。押野准尉もしかり、同時に敵の標

的となり、双眼鏡をしっかりと握ったまま山上から転げ落ちていった。

炎暑の七月とはいえ、高地の朝はまだ冷氣（靈気）が漂い指揮班員の見守る中、あつという間の出来事であった。朝霧を衝いて敵状偵察中、隊長以下二人の犠牲者が出てしまったのである。

押野隊長を失った第四中隊は建制順序のとおり、ただちに太田雪夫曹長（指揮班長）が中隊の指揮を執り、第四中隊の現状を部隊本部へ報告するや、再び鶏籠嶺確保、死守の命令が最前線へ到達したのである。

敵はいよいよ迫撃砲の照準を鶏籠嶺へと向け、砲列を敷き集中射撃を浴びせてきた。みるみるうちに山肌は禿げただれ、山の形が変わっていく。迫撃砲の弾着を見、またポツという発射音を聞いては移動して歩き、迫撃砲弾から身を護るため、いつの間にか、ポツという発射音から着弾までの間隙、秒数を読み取り弾着地より身かわし難を逃れることができるようになっていた。

「おおい……着弾が近いぞ！ みんな気をつけろ

よ……」と怒鳴ったのが、白石軍曹である。

敵側を見ると、今日もまた補給のための飛行機が飛んで、小さな落下傘が点々と落下しているのが傍観出来る。米軍の給与である。激しく続いた迫撃砲の射撃がひととき沈黙したので、空になった水筒に水を補給しようということになり、私はいまだ余力があるというか元氣だったので、「俺が行ってくる」と石川兵長を制して出かけた。水汲みに適した軽装となり、護身に十四年式拳銃を借用し、六個の水筒を両肩から下げての山登りは相当の重労働ではあった。

こういう泉のあるところは、すこし窪みのある所か崖のようにえぐれた所か、または、木陰か岩、石の破れ目のようなところから砂を吹き上げるように湧き出ているものだ。いま水汲みに来たこの泉も崖のえぐれた所で、木も生え、直射日光も透さぬ所である。

この泉のある所へすると降りようとしたところ、肩から吊っている水筒が前方へ繰り出したので視界を遮られ、誤って足をとられて湿地帯へドサツと落ちた。転げながら眼に入ったものは、四秒で発火爆発する手

榴弾ではないか。アッと息を呑んだ瞬間、反射的にグイと手首が伸びていた。恐る恐る見た手元の固形物体がいやに大きく眼に映った。それが不発だったことは確かである。ホッと一息をついた。ちょうど落ちた角度がよかった。

水を水筒に満たし、喘ぎ喘ぎ山に登り頂上に近くなると、またもや迫撃砲弾の轟音の交差である。「水を持って来たぞお……」上に向かって怒鳴った。やっと山へ登りつめたとき、石川兵長が蒼白な顔をして、ガタガタ身を震わせていた。私が水汲みに下りるまでいた「各個掩体」に迫撃砲の直撃弾が当たり、赤茶けた山肌を露出して大きな窪みが出来ていた。そこを指し示しているのだが、恐怖のあまり声が出ないのだ。それほど恐ろしい迫撃砲弾の落下であった。

私はここでまたしても息を呑んだ。靈川に入っているままのこと、ただ、実践躬行したまでなのだが、私にまつわる不思議な生命力を覚えた。

出迎えた松島兵長が「おお！ 宮嶋、お前命拾いたぞ」。見ると置いてあった私の飯盒は迫撃砲の破片

で無惨につぶされていた。

敵は間断なく迫撃砲を撃ち込んでくる。鶏籠嶺をしてここを先途と猛烈に迫撃砲の総攻撃を開始した。ポツ……。「そら！ 撃ったぞ！」。前方へも落ちない。シュルシュルの通過音もない。不気味な数秒間。ガァーンという爆発音と共に、私たちは濛々と立ちこめる土煙の中に閉ざされた。堀上軍曹が四方を見回して、「アッ！ 白石がやられた！」と大きな声をあげた。ボロボロ涙をこぼし、「どうも今日は、白石のやつ、おかしなことばかり言うと思ったよ……」。

汗と涙で土埃が溶け、泥まみれの顔をクシャクシャにして溢れる涙を拳骨で拭っている。白石軍曹を介抱しようと、石川兵長が泣きながら、「白石班長殿！ しっかりしてください」と真っ先に手を差し伸べた。グググッと、まるで蛙が伸びたようにして突っ張っている。グググと伸び切った体を一人の力では、到底抱き堪えられるものではない。差し伸べた手を傷者の背へ回し支えようとするのがやっつとである。

迫撃砲の弾着は、白石軍曹の右脇腹をえぐりとする距

離にあった。ほとんど直撃に等しく、右腹部をグイとえぐりとられ、八三式の小銃など使いものにならなくなつて飛び散り、鉄帽の顎紐は爆風でもがれ、勢いあまつて鉄帽は山の斜面をころろと転がり落ちていった。右腕は、普通、屈伸運動をするときと違う反対方向に曲がり、眼を覆う惨状である。

「白石班長！ 班長殿！」耳元で叫び呼んでみた。大きな声で呼ぶとわずかながら瞳を一点に集中しようとしているのか、白眼だけが大きく見え、三白眼のようになり、黒い瞳だけが中央部へと寄っていく。いくら私の声がわかるのかなと思ひ、懸命に白石軍曹の顔を覗き見た。

砲弾炸裂の瞬間、無意識にしがみつき、掴んだわづかばかりの草の根がまだ左の掌に残っていたのも儂く痛々しかった。石川兵長と共に、顔すれすれまでに己の顔を近づけて反応を待ったが、ついに一言も発せず息を絶えていった。ほとんど即死である。石川兵長は溢れる涙を拭おうともせず、帯剣と鉄帽とを駆使して一生懸命埋葬するための墓穴を掘り始めた。「班長殿、

もし命あつて私が内地へ還ることがあつたとき、必ず班長殿の遺品は留守宅へお届けします」と語りかけていた。

白石軍曹の遺品の中から、次のようなものを発見した。家族の写真と許嫁の女性の写真。その人と交換したであろう手紙を肌身離さず持ち歩いていたことがわかつた。またも新たな涙が皆の頬を伝わり戒衣を濡らした。白石軍曹は一口に言つて、模範兵そのものの人であつた。班長は学問好きで、私より一年先輩の十四年徴集兵（大正八年生まれ）であつた。

後に石川兵長は生還して、白石軍曹との約束を果たしている。復員直後、故白石壽一曹長の留守宅（群馬県碓氷郡岩野谷村野殿）を訪問し、年老いた御両親はその後、間もなく相次いでこの世を去つたという。その死は、あるいは息子の帰還を期待した望みを絶たれ、死去の報をもたらした悲しみに、早くこの世を去つたのかもしれない。戦争の悲劇をここにも目のあたりにしたようである。

押野准尉が斃れ、後任に山田少尉が第三中隊から第

四中隊長として着任した。第四中隊は「死（四）中隊」のニックネームがあったか。迫撃砲の熾烈な攻撃はいよいよ激しくなり、指揮班も直撃弾により多くの負傷者を出した。炎暑の七月二十二日、山田中隊長は撤退命令を受け行動を移したが、迫撃砲弾により戦死された。

撤退に当たり、鈴木衛生兵は、早朝に戦死した押野准尉と大沢上等兵の遺骨収容のため「小指」を切ってくるからと、我が陣地と反対側の斜面を下りはじめた。しばらくして鈴木衛生兵が大きな声を張り上げ下から怒鳴っている。「敵が来ている」とのこと。稜線から山裾を覗くと、敵は准尉の遺体の周りに群がり、軍刀や双眼鏡を取りはずしている。鈴木は衛生兵として任務を全うしようとしたが、ついに達し得なかった。

鈴木衛生兵は復員後も十年程、この一件が脳裏から去らず悩み抜いたという。三十年ぶり部隊戦友会で當時を語り合うことができ、すっきりしたと、晴々とした顔が印象的であった。

第四中隊はその後、夜陰に乗じて鶏籠嶺を脱出する

のであるが、中隊長山田少尉の迫撃砲破片は腹膜に達し出血多量であり、私より長身の重い体を背負つての山岳の上り下りは相当の苦痛であった。戦死者記録によると「二十二日被弾戦死」とあるから戦死は二十三日であったと推測する。

山田隊長の後任は、向井十郎少尉となり、強力な第四中隊が発足した。敵は日本軍が敗走したと思つたのか、もう厭な迫撃砲の発射音や炸裂音も聞こえなくなった。その後中隊長は老安屯撤退を決断し、「御霊よ靈川に安らかに眠れ」と、隊長以下現有中隊主力は濁流に呑まれた戦友三人へ部隊の敬礼をし冥福を祈り、第四中隊は部隊の最後尾となり、本部追及へと重い足取りで靈川地区を脱出し、全県方面へと北上したのである。

私は撤退し全県に向かう途中疲労困憊し、所構わず眠りこけたので、夜行軍の軍靴の音は既に私の聴覚の中になかった。ところが、大きな虹を見るような薄い煙霧が張り出した。辺り一面綺麗な薄い雲に覆われていた。その瞬間、私の眼前に一際大きな実物大のおふ

くろの面影がポーッと浮かんだ。その面影はしきりに私を呼んでいるような、何かを言おうとしているような表情である。

私はその顔に縋るように声をあげようとしたが、どうにも声が出ないうちにそのままスッと消えてしまった。

ハッとわれに戻った私は慌ててとび起き行軍の列に伍した。だが隊列の中には見覚えのある顔はない。明らかに他部隊の顔である。寝ボケ眼で隊列の兵に問うと、わが田賀部隊はすでに前方を歩いていると言われ、懸命に歩度を伸ばし、わが本隊を追及合流することができた。

行軍中も絶えず母の幻が臉に映り離れず不思議なほど力が湧きあがってきた。「よし！ 俺にはおふくろが一緒についていて、力を貸してくれているんだ。武運を祈る母の願いが励ましてくれるんだ」。自らを励まし、重い足どりの夜行軍の運ぶ足下も自然に軽くなってきた。疲労困憊の私は母の幻影に誘導され、夜行軍の脱落から救われたのである。

信仰の道を歩んでいた母は、戦野を駆け回る私らのため、終戦復員まで連日お百度を踏み、ことに兄弟で最終の復員者である私の生還を信じ祈願していたという。まだテレビのなかった時代、ニュース報道の主役はラジオである。そのラジオから節兵団田賀部隊第四中隊全滅の報が流れても、信ぜず屈せずお百度参りを欠かさなかったそうである。私の復員時に、まず私の足の爪先からみづめ、逐次上の方へと眼をずり上げ、健在、無事帰還を確認したという母であった。

#### 復員下命

「おかしいな……、変だなあ」と思いながらの行軍途上、「終戦の通伝」のあったことは概報のとおりだが、戦闘に明け暮れた広西省と湖南省境黄沙舖付近で十五日知った。これより先八月十四日には停戦詔書が発布されていたのだ。

八月十八日湖南省祁陽<sup>きやう</sup>着、復員下命、衡陽<sup>こうやう</sup>へ着くまで、尖兵中隊と重慶側の兵との小競り合いがあったが大したことはなく、目指す衡陽へと撤退部隊は進んだ。

霊川の戦闘で戦死寸前に白石軍曹の呟いた衡陽。あ

の日残した言葉を想い起こしながらひたすら歩いてきた。

「衡陽に着くまでに、この戦争はどうにかなったかもうよ」。白石軍曹の残した言葉である。あの日あの時の言葉と、戦死の状況がありありと脳裏に甦っていた。「白石班長、来たぞ!」。だが、残念ながら終戦。それも敗戦だ! グッとこみあげるものを抑えて、八月二十七日衡陽に着いた。